

### 視点3

## 外で遊んで安心を重ねて大きくなる、 ということ

菊地知子

(保育士)

二〇一六年のこの春、二〇一〇年四月に小学校に入学した子どもたちが、卒業を迎える。その子どもたちは、もうすぐ二年生になり新年生が仲間入りする、といううれしい春三月に、

東日本大震災、原発事故に遭っている。福島市のS君もそんな一人。四月からは中学生だ。

S君は、小学校入学と同時に、M学童クラブに入所した。学童一年目、春夏秋冬の毎日、すぐそこにある田んぼや畦道や牧草地で遊んで遊んで遊び尽くして過ごしたS君の、震災前と二〇一一年以降五年間の学童クラブでの外遊びの軌跡を追っていきたい。なお、本稿は、福島市に住む大澤由記さん（S君と

その二人の弟のお父さん）にお借りした記録や学童クラブのおたよりなどを基に、菊地が構成したものである。

#### 学童一年目の夏休み―大澤氏の記録から

外で一日中ザリガニ、タモロコ、虫捕り。お迎えに行っても学童（クラブ）は閉まっていて誰もいない。しばらく待っていると、目の前の田んぼから虫捕り網を手に、泥だらけの子どもたちが帰ってくる。Yさん（学童クラブ舎の大家さんで、同じ敷地内のご自宅に住んでいる）手作りの砂場、かつては家畜の放牧場であった裏の原っぱが彼らの遊び場。

菊地知子（きくちともこ）

お茶の水女子大学附属いすみナーサリー主任保育士。

お茶の水女子大学人間発達科学研究所研究協力員。

## 震災後二年間の記憶 — 大澤氏の記録から

当時、保護者会会長をしていた（下の子ども）の保育園で精いっぱい。学童の記憶がほとんどない。Sの姿で心に残っているのは、毎日一人で学校に行くランドセル姿<sup>ナツ</sup>、ホールポディカウンター検査の前日の言葉<sup>ナツ</sup>。学童で印象的だったのは骨折事故の多発、行政ではなく皆さんの厚意による扇風機設置。しかし、窓を閉め切った部屋では熱風を感じるだけだったようだ。

### 二〇一〇～二〇一四年の学童の外遊び

#### ◇二〇一一年

四月おたよりから…原発事故の影響で外遊びができず、子どもたちのストレスもたまり、落ち着かない日々が続いています。学童としては室内遊びを充実させて対応していきたいと考えています。学童では外遊びは中止しています。今後は各小学校の対応に準じたいという考えです。六月おたよりから…建物周辺に水をまいたり、

カーテンを付けたたり、植物を育てたり、放射線量やその影響を減らす努力をしています。／毎週金曜日に外遊び（10～15分）をするので、外遊びをさせてもよい場合は、長袖・長スボン着用、帽子を持たせてください。尚、雨が降った場合は外遊びはしません。

#### ◇二〇一二年

六月四日の地域懇談会報告書から…週1回の外遊びを子どもたちは非常に楽しみにしています。学童では毎週水曜日に放射線量を計測。線量は徐々にですが下がりがつつあるので、外遊びをもう1回（増やす提案を保護者にしたところ、週1回15分から）、週2回20分行うことにしました。尚、今後も高圧洗浄をする予定です。

六月おたよりから…水・金曜日はみんな「今日、外遊びできるよね」と言って目をきらきらさせながら帰ってきます。上級生たちも「まだ宿題終わってないけど、外遊びしてからやる」と言って、20分だけ思いっきり外で遊んでいます。

外で遊んだ後は、いつもより落ち着いて行動できているように感じます。走っている姿を見ると、やっぱり外遊びというのはすごいエネルギーを子どもに与えてくれるものだ！と感じます。

九月おたよりから…(夏休み中は、保護者に承諾してもらい、外遊びを1時間にしていたが)学校が始まったら週2回、しかも20分だけでは嫌だ！という声が多く、皆で話し合いをして、「毎日30分外遊び」ということに決まりました。

#### ◇二〇二三年<sup>ま</sup>

六月おたよりから…H小の三、四年生は学校帰りの道草が楽しいようで、ゆっくり遊びながら帰ってくるが多かったのですが、お父さんお母さんが(放射線の影響を)心配していることを伝えて話し合いをして(中略)週2回の道草はOKということにしました。道草から帰ってきた後は靴底を洗ったり、手洗いうがいをするなどの対策はしっかりしていきます。

十月おたよりから…九月に入ってから、今まで30分だった外遊びの時間を40分にしました。10分延びただけなのに、子どもたちは「やった〜！」と大喜びでした。

#### ◇二〇一四年

二月おたよりから…久々の雪で子どもたちも大喜びです。待望の原っぱでの雪遊びを楽しんでいます。

十二月おたよりから…事故後三年八か月ぶりに牧草地で遊びました。今まであまり外に出て行かなかった子どもも喜んで行くようになりました。手洗いうがいの約束はみんな守っています。土曜日には秘密基地作りもしました。遊んだ後に、いつもサツカーをする蔵の前を通ったとき、「この場所ってこんなに狭かったっけ？」と感じるほど牧草地は広いです。

見守り続けてくれる人―大澤氏の記録から

(二〇一五年、二〇一六年の冬) 子どもたちは

三時半から四時半まで外で遊んでいるという。子どもたちがしたい遊びに必要とおぼしきテニスネット、バスケットゴールなどを、大家のYさんは手作りしてくれた。子どもたちを大切に見守り続けてくれる人がいることを切に感じる。

S君らの学童クラブでの生活は、時間的空間的に限られた「外遊びの時間」なるものが存在しないほど、かつては外遊びで占められていた。すぐそこにある土や水や風、陽の光への呼応、あるいはそれらとの対話の中でこそ子どもたちは自らの生活をその人らしく生きることへの安心感を蓄えてきた。

S君は小学校卒業とともに学童クラブでの生活を終えるが、S君らのここまでの思い・葛藤や切なさ、忘れ去られることがあつてはならないと思う。同時に、「僕たちは外で遊びたいんだ」「外で遊んで大きくなりたいんだ」という、当たり前前の願いとそれを聞かせてほしいと願われる経験とが下級生た

ちに引き継がれ、「うん、大丈夫」という実感  
「安心をしつかりと重ねて大きくなつていてほしい。そして私たちは、子どもたちの笑い声、仲間を呼び合う声が野に山に響き渡るために、子どもたちの思いを、聞かせてほしいと願ひ続けなければ、と改めて思う。」

## 注

1 当時、S君以外の多くの子どもたちが、保護者の車で登下校するようになった。

2 検査前夜、S君が「俺は（数値が高く）出ると思う。草むらに入っちゃったから……」と漏らしたという。普段そんなことを気にしているそぶりもなく屈託なく遊んでいるように見えた彼の心の奥の思いに、親の胸は痛む。

3 この年の四月から翌年三月まで、菊地はM学童クラブに月1〜2回遊びに行っていた。事故前の学童クラブでの生活を知るS君ら新四年生二人がここを巣立つ前に、私たちが共有させてもらっておくべきことがあると強く感じたためだ。